の身口意のはからいをも含めた人間三業の行為までが、同じく仏に対して不廻向でなければならないことに気づくであろう。それゆえにわれわれが幾度問を繰り返そうとも、所詮は循環論の範囲を出ることが出来なかったのも当然である。それでなければ不廻向ということそのことがくずれてしまうほかはないであろう。

かくして不廻向ということは、念仏は即ち「弥陀廻向の法」であり「一乗真妙之正法」（浄土文類聚鈔）である事実を自己の実践に即して身証したものの体験的発言であり、自身の行為の一々が仏にはからわれまいらせた他力の行であること、さらにいうならば、われわれの生そのものが、仏心大悲の法によってある事実に開眼しえたものの言葉であるというべきである。

他力の廻向

念仏は自力を頼む心を破るものである。それゆえに自力の行ではない。ひとえに大悲の本願に帰する身の行である。それゆえに、他力の廻向（たまもの）である。したがって念仏は、凡聖・善悪の人によりて、その徳を異にするものではない。かえってすべての人は、念仏の徳によりて一に帰せしめられるのである。ここに人みな道を同じうして、その徳を斉うせしめられる世界があるのである。

弥陀は全人の法として名号を選びたまい、われらは自力の及ばないことを知って念仏を選ぶ。ここに選ぶ心の底に深く選びたまいし願心を知らしめられ、かえって選ぶ心も、選びたもうた願心の廻向なることを思わしめられる。恵むものは平等の大悲であり、受くるものは業苦のこの身である。この因縁において如来の本願もわれ一人がためと感ぜられ、わが身に称えられる念仏も、全人の道と身証せられる。まことに不可思議の事実である。

（金子大栄著『口語訳教行信証』領解より）